ふくしま未来神楽

第七番
呆然漠然巨人

【解説】及川 俊哉

と表現することがあります。古代の人々も同様に、自然災害の傷跡を目の当たりにしたとき、「こんなことは人間には成し得ないのだから、巨人の仕業なのではないか」と考えたのだと思います。こうした素朴な感想が定着していったとき、ダイダラボッチのような巨大な神のイメージが生まれてきたのではないでしょうか。

一方で、柳田國男は「盤古（ばんこ）」という中国の始祖神の名前を挙げています。

この世界ができたばかりの頃、天地は近く接しており、窮屈でした。そこで「盤古」という神が天と地の間に入り、天を高々と押し上げたため、はじめて今のように広い世界が現れた、というお話です。

おそらく「大徳坊」も、もとをたどっていくと「盤古」のような創世神話の神だったのだと思われます。古代の人々は自然の大きな営みに触れるにつれ、こうした造化の神秘は人間を超えた巨人によって行われたのではないかと想像したのでしょう。つまり、「巨人」は人間を超越した「自然の力」の象徴であるわけです。自然は人間の価値観を超えた行いをしますから、創造的にも働きますし、災害のような破壊も行います。

今回の「未来神楽第七番　呆然漠然巨人」では、東日本大震災をもたらした自然の力を伝説の巨人である「大徳坊」になぞらえて表現しています。大いなる自然の力は、時にたいへんな災いとして私達の前に姿を現します。しかし、私達は自然の力に頼らずには生きていけません。

矛盾する自然の力を前に、頭を低く垂れながら、「どうか荒れることなく鎮まってください。平穏と豊かな実りを与えてください」と祈る。こうした古代人の敬虔な気持ちにならって、今年も未来神楽を演じたいと思います。

今年で四回目を迎える未来の祀り。今回の「未来神楽第七番　呆然（ぼうぜん）漠然巨人（ばくぜんきょじん）」のモチーフは、信夫山を作った「大徳坊（だいとくぼう）」のお話です。大徳坊のお話は次のように福島に伝わっています。

✿

昔々、どこからか大徳坊と呼ばれる大男がやってきた。大徳坊は、「たんがら」と呼ばれる背負い籠に三背（みせ）ほど山土をいれて背負って来た。そして、平らだった土地に、ぽつりぽつりとその土をあけた。はじめに土をあけたところが「羽黒山」（現在羽黒神社のある峯）となり、つぎに土をあけたのが「熊野山」（東側の峯）となり、三つ目に土をあけたのが「羽山」（西側の峯）になった。そうして、大徳坊がたんがらの底を見ると、土くれが少し残っていたので、ぽんと空けたのが一盃森となった。昼飯にしようと阿武隈川に入って手を洗ったが、足の裏がぴたぴたと濡れる程度だった（それほどの大男だった）。飯曲輪（めしわっぱ）を開けると、飯の間に小石が混ざっていた。その石を箸でつまんで投げたのが「石が森」となった。

（西坂茂『復刻版 信夫山』を参考に現代風の文体に改めました）

✿

巨人の伝説は九州を中心として日本各地にあり、「ダイダラボッチ」「デーダラボッチ」などと呼ばれています。「大徳坊（ダイトクボウ）」という名前も、これらの巨人伝説とかかわりがありそうな音の響きのする名前です。

千葉県富津市には村人総出で「大わらじ」を作って奉納する風習があります。大きなわらじを見れば、疫病神が「この村にはこんなに大きなわらじを履く大男がいるのか」と恐れて逃げ出すだろう、と考えられているそうです。

また、三重県志摩市では、やはり「大わらじ」を担いで海に入るお祭りがあります。これは、昔、村にダイダラボッチが来て暴れていたが、娘が大きなわらじを編んでいるのを見て、「自分より大きな男がこの村にはいるのか」と驚いて逃げたという言い伝えによるということです。

皆さんご存知のように福島市には奉納された大わらじが練り歩く「わらじ祭り」があります。大わらじは古くは近隣の各集落で作られ、信夫山の仁王門（明治維新の廃仏毀釈により破壊されて現存しない）にたくさん奉納されていたようです。他地域の伝承も参考に考えると、大徳坊の伝説と大わらじの奉納はおそらく何らかの形で結びついていたのではないでしょうか。また、巨人が厄を払う人間の味方だとも、暴れて人々を困らせる存在だとも考えられていた点が興味深いところです。

民俗学者の柳田國男は「ダイダラ坊の足跡」という著作の中で、「われわれの祖先はいつの世からともなく、孤山の峰の秀麗なるものを拝んでいた。飯盛山というのが、その最も普遍した名称であった。御山御岳として特に礼拝する山だけは、この通り起源が尋常でないもののごとく、説明せられていたように思われる。」と述べています。信夫山は盆地の中にひょっこりと取り残されたようにそびえる「孤山」ですから、古代からの信仰の対象になっていたものと思われます。こうした信仰対象となる聖なる山には、特別な成り立ちがあるべきだとして、巨人が土を持ってきたのだとする起源説話ができたのだ、というのが柳田國男の説です。

また、柳田國男は「日本の天然地理には（……）実際の変化は多かった。すなわち山作りの神の、永く足跡を世に遺すべき理由はあったのである」とも述べています。つまり、日本では地震・津波・噴火・台風などの自然災害が多く、こうした災害によって地形が大きく変化することも多かったので、一夜にして山を作る巨人の神が想像されたのは、不思議ではないのではないか、ということです。

現代でも、たとえばテレビの災害レポーターなどが、土砂崩れの現場を指して「まるで大きな人間が削り取った跡のようです」など